小特集「コンピュータシステム」の編集にあたって

鈴木則久[†] 松田晃一[††]

1989年初頭を飾る論文誌として，小特集「コンピュータシステム」をお届けします．これは，1987年11月5日，6日の2日間にわたって開かれたコンピュータシステムシンポジウムで発表された論文の中から選択して，小特集として編集したものです．

このシンポジウムは，本学会のオペレーティングシステム研究会および計算機アーキテクチャ研究会が共同で開催したもので，一般論文14件が7つのセションで発表されると共に，3件の招待講演および「OSと日本語サポート」と題するパネル討論と大変多彩なプログラムで開催され，約110名の参加者の間で，熱心な討論が行われました．シンポジウムのプログラム委員会はその中から6編の論文を選び，特集号として編集委員会に提案をしました．一方，論文誌の編集委員会は，後にも述べますように論文誌を質・量ともに一層充実させ，より魅力あるものにするために，新しい試みに積極的にチャレンジして行こうと考えておりましたので，このような提案は大いに歓迎でありました．

このような訳でこの特集の企画はとんとんと話が進み，今皆様が手にしておられる論文誌ができあがりました．

ところで，論文誌の購読者数は，学会会員の総数に対する比率から見て，残念ながら十分とは言えない状況にあります．編集委員会としては，少しでも魅力ある論文誌とするために，いくつかの試みを既に実行に移しています．1986年からは，それまで隔月発行であった論文誌を月刊化しました．また，従来から要望の多かったカラー写真の掲載も可能にしました．さらに，特集号を設けることも1987年からはじまり，今号で3回目の特集となりました．

特に，今回の特集は既に述べましたように，研究会からの企画提案という今までにない，良き先例を開くことができました．今さら申し上げるまでもなく，学会活動の基盤は，日常的な研究会活動にあって，その活動が会員の中に幅広く，深く根を張ることによって，学会が活性化し，より高く豊かな成果を得ることができるものだと考えます．その意味で，今回のような研究会の活動に根ざした試みを今後も一層積極的に取り上げて，学会の活性化に少しでも寄与できればと考えております．既に，各研究会主査に対しては，編集委員長からシンポジウム等の論文をベースにした特集号の企画提案の依頼を差し上げておりますし，研究会との相談，連絡の窓口として編集委員にはそれぞれ担当の研究会を割り当てております．各研究会からの活発な御提案により，年に数回程度の特集号が発行できればと期待しております．

さて，本小特集のテーマ「コンピュータシステム」は，シンポジウムのタイトルからとったものです．シンポジウムの意図は，コンピュータの開発動向が従来にも増して非常な広がりをもってきたことに鑑み，多軸化したコンピュータシステムの様々な分野での先端技術，研究に関し現状を総括しようということでありました．つまり，計算機システムの利用形態の多様化に伴い，システム技術の発達は多軸化の方向になってきています．例えば，汎用大型計算機は，ますます高性能技術を追求する一方で，高機能な使い勝手の良い個人利用のシステムに関する研究開発があります．さらに，分散処理，並列処理や新世代技術の追求が盛んといった具合です．この様な様々な視点から最新の研究状況について議論することを狙いにシンポジウムが開催されました．その中から，本特集では6件の論文を収録していますが，もとよりこのように限られた範囲でコンピュータシステムを網羅できるはずもありませんが，幾つかの分野については最先端の研究状況の一端を窺うことのできるバラエティに富んだ論文を集めることができたのではないかと考えます．

本小特集の編集にあたっては，オペレーティングシステム研究会と計算機アーキテクチャ研究会の皆様をはじめ，多数の査読者および著者の方に，多忙の中，積極的な協力を頂きました．ここに厚くお礼を申しあげます．

† 日本IBM（株）東京基礎研究所
†† NTT技術企画本部